P1-025

出生コホート調査におけるインフォームド・アセントに関する考えと子どもに伝えたいこと～エコチル調査熊本大学サブユニットセンター～

小田 政子、甲斐村 美智子

熊本大学大学院 エコチル調査

【背景・目的】
熊本大学は、環境省のプロジェクトである「子どもの健康と環境に関する全国調査(以下、エコチル調査)」を実施している。エコチル調査は、子どもの健康に影響を及ぼす環境要因の解明を目的に、2011年から2032年まで予定されている出生コホート調査で、母子約10万組を対象に全国15地域で胎児期から13歳まで定期的に健康問題を追跡している。未成年者の医学研究の参加に対しては、子どもを保護する観点から親のインフォームド・コンセントを基本としながらも、子どもの権利の観点から子ども自身の同意の有無を尊重することが必要とされており、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」でも努力義務として規定されている。しかし、その時期や手法については学術的な検討が不十分であり、倫理指針にも記載がない。このため、倫理的課題の一つとして、成長段階に応じたインフォームド・アセント(以下、アセント)の取得が挙げられる。そこで、代諾者である保護者のアセントに関する考え、及び子どもに伝えたい内容について明らかにすることを目的とする。
【方法】
熊本大学サブユニットセンターにおいてエコチル調査に参加登録した母親20名を対象に、半構造化面接法によるフォーカス・グループインタビューを実施した。得られたデータは、内容分析を行いカテゴリー化した。
【結果・考察】
アセントに関する考えとして、≪調査の主体者に関する認識不足≫≪調査の主体者・権利意識から必然≫≪調査過程における偶然的出来事≫≪調査終了以降における偶然的出来事≫という4つのカテゴリーが抽出された。子どもに伝えたいこととして、≪次世代以降の子どもへの貢献≫≪環境要因が健康へ及ぼす影響≫≪未来に受け継がれる生命≫≪子どもの病気の原因解明≫≪親子で参加する調査≫≪日々の生活において判断する力≫≪子どもへの配慮≫という7つのカテゴリーが抽出された。これらの結果から、アセントの考え方には母親が有する法的無能力とされる子どもの人権に対する曖昧な認識が影響していると考えられた。また、母親が子どもに伝えたいこととして、次世代に対する利益的な期待からの社会貢献や調査の社会的価値、調査を通した子どもへの愛情を重視していること示唆された。

P1-026

視聴行動の成長と個人差 －8ヶ月時と1歳6ヶ月時の縦断研究より－

大熊 加奈子[1]、谷村 雅子[2]

[1]日本女子大学 人間社会学部心理学科、
[2]関東学院大学 人間環境研究所

【目的】
2歳未満児のテレビ・ビデオ・DVD(以下、TV)の長時間視聴と言語・社会性の遅れとの関連の可能性が小児科医や発達の専門家から指摘され、1歳半児の集団調査で確認したがその因果関係は明らかでない。長時間視聴の発達への影響を検討するため、家庭でTVがついている時の行動をビデオ記録し、視聴習慣と発達との関係を縦断的に把握することにした。乳児期早期からのTVの付けっ放しと言語発達の遅れとの関連が示唆された(本学会、2016年)。今回は両月齢間の視聴行動の相違を検討した。
【方法】
8ヶ月の健常児22名を対象とし、普段TVを見る部屋で、児がよく見る番組やビデオソフトを8ヶ月時に20分、1歳6ヶ月時に2時間再生し、児と同室者の様子をTVの近くに設置した固定カメラで自動撮影することを保護者に依頼した。ビデオ記録から対象児と同室者の行動及び視聴対象の属性を秒単位で起こし、両月齢時の視聴行動と視聴対象の属性との関係を解析した。本研究について大学の倫理委員会で承認を得ている。
【結果および考察】
1)1歳6ヶ月時の総注視時間割合は平均69.4±18.9%で5分毎にみると半数が時間経過と共に減少していた。8ヶ月時60.5±24.9%に比して開始後20分間は79.4±18.2%で有意に増加し2時間通しても有意ではないが増加していた。各児の1回の平均注視時間の平均は8ヶ月時13.4±7.4秒、1歳6ヶ月時21.5±16.7秒、最長注視時間の平均は8ヶ月時102.1±66.0秒、1歳6ヶ月時345.2±274.6秒でいずれも1歳6ヶ月時の方が有意に長かった。視聴対象の属性別総注視時間割合は、8ヶ月時には音楽や映像が明るく楽しい、映像変化が多い、前奏、お兄(姉)さん、笑顔の場面で高く(74～85%)、目立つもの無し、動物、ナレーションの場面で低かった(36～38%)。1歳6ヶ月時には笑顔の場面で最も高かったが(93%)、目立つものが無い場面でも見続けていた(78%)。歌や場面の終わりまで見続けるなど成長に伴って内容に関心を持ち注視が持続するようになるものと推察される。
2)両月齢間で最長注視時間や平均注視時間が有意に相関していた(r=0.408、0.513)。視聴環境を考慮してもTVがついているとじっと見続け易い児の存在が示唆された。8ヶ月時には注視時間と非視聴時の児からの発信頻度とが関連しており見続け易さと生得的な言語・社会性の遅れ易さとの関連性は考え難い。見続け易い子どもには特にTVを長時間見せないように留意すべきと考えられる。

Presented by Medical*Online